

古民家に学ぶこと

夢木香の住まいづくり

夢木香は自然素材にこだわり施工します。素材は身近にありますが、施工するためには職人の技術が必要です。木や竹や土や紙や藁を、大工、左官、瓦、建具、畳職人たちが力を合わせ仕上げてゆきます。

古民家の再生を手がけることにより、昔の職人たちと会話ができます。力強さと優美さを兼ねそなえた丸太の木組み、落ちついた風合いのいぶし瓦、漆喰の美しさと、そり壁の優美な曲線、繊細な、透かし彫りの欄間や組子など、いたるところに昔の職人の心意気が感じられます。その技術を伝承し、次世代に伝えてゆくことが大切だと感じます。古民家の再生に学び、その技術と思想を、新築やリフォームにいかしてゆくことが、私たちのつとめだと考えます。

本当のエコ住宅とは

近年、エコ住宅をうたいもくんに、高気密高断熱がさかんにとなえられています。通気を遮断し、吸湿性のないビニールクロスの家が多く見受けられます。結露が発生しやすく、カビの原因をつくり、カビがダニを呼び、ダニの死骸がアレルギーを誘発します。それを選けるためには、エアコンや換気扇あるいは除湿機や加湿器や空気清浄機が必要です。つまり、設備機器を効率よく使うための工法です。設備機器がなかった時代に造られた古民家には、機械をつかわない工夫があります。呼吸する自然素材がふんだんにつかわれ、梅雨や夏の暑さをしのぐ知恵があります。寒さに対して、適度な気密と断熱をとれば、暮らしやすい住まいになります。本当のエコとは設備機器をできるだけつかわない住まいだと考えます。

200年住宅

ようやく住宅の耐久性が見直されてきました。日本の住宅の寿命は30年です。30年では木が循環していきません。木材の80%を輸入し、30年の住宅寿命しかない住宅しか造られていないのが現状です。技術がないわけではありません。日本には100年~200年の住宅、200年~500年の寺社仏閣は数多く存在します。自然の実物大実験を経た伝統的構法には学ぶべきものが多くあります。台風が襲来し、地震が多く、梅雨がある過酷な建築条件の中で耐えてきた古民家に学び、新築やリフォームも、家づくりは子や孫たちのためにとの思想を取り戻したいと考えます。

五感で感じる住まい

今、この季節、さわやかさを感じてほしい、木と土壁がもつ調湿作用で。本物の自然素材のにおいを、木の香りと漆喰や畳のにおいで。肌にふれるこちよさを、無垢の床板をはだして歩いてください。キッチンも洗面も浴室も無垢材の手造りです。見て楽しんでください、伝統的な木組みと、骨太の木組みが持つ安心感を。耳を澄ましてください、響かない音を、木や土は音を吸収します。適度な反響、なぜなら多くの楽器は木製です。今、まわりの環境は、無機質な物、人工的な物に変わりつつあります。せめて家の中だけでも、こちよ空間がほしいものです。子どもたちに自然のハーモニーを聴かせてあげたいものです。

住まい人の想い

人間が家をつくるが 家は人間をつくる (イギリス元首相 チャーチル)

井手邸の再生

棟梁(建築士)松尾さんの事

古民家再生の専門家松尾進さんは数々の古民家の移築・再生を手がけ情熱を燃やす研究も怠らない。松尾さんは「百年もてた家は手を加えれば百年はもつ」と言う。その言葉に心を動かされ井手邸再生を決意。

古き家は 手を加ふれば これからも 木を信じ 木を知り尽くす 棟梁にも 保ちいくなり 再生に 賭くる頭(かしら)の 情熱は 託せし生家は 甦りくる

古民家に 思ひを馳する 棟梁の 興味溢るる 話楽しき

松尾さんの愛弟子和田恵理子さんのこと

和田さんは国立大学工学部建築科を卒業、一級建築士の資格を持つ。親元の大分を離れ佐賀県鹿島の師匠の松尾さんに師事する可愛い娘さん。

大学で 建築学びて 資格とり 匠を目指す 親元離れ 古き家に 魅せられ師につき 修業する

自らも 壁土を塗り 手を汚し 伝統の技を 体得しをり 師は弟子に わが子のごとく 目を細め 匠の技を 伝承しをり

古民家再生の達人・職人さん達のこと

古民家再生の達人・職人さん達のこと

古民家を 甦らせる 匠の 技の世に 残しおくべし 長男として先祖祭り・墓守りのつとめを果たす覚悟を決める この家に 宿る祖先(みおや)の御霊(みたま)をば 守りいかむと 心決めたり

古民家専門の建築士の熱意にほだされて我が家再生を決定 棟梁に 再生託せし 我が家の 秋の完成 待ち遠しかり ふるさとの佐賀ライフを楽しみたい 暮らしたる 終の棲家の 暮らしたる

終の棲家はふるさと佐賀で

私の実家は長崎街道沿ひにあり明治初期の建築か 街道に 浴びて佇む 古き家(や)は 今も明治の 面影残り 実家は代々呉服屋を営んでいた 格子戸と 土蔵造りに 在りし日の 商家の風情 漂ひにけり 社会人になるまでこの家で暮らした この家に 生ひ立ちたれば 若き日の 思ひ出多(さわ)に 今も浮かび来

のどかで豊かな佐賀平野は私の原風景 佐賀平野 天山・背振 多良・雲仙 昔のままに 景色変はらず 末弟夫婦が父・母を守り生家を守ってくれた 家を守(も)り 父母の看取(みと)りに 忠実(まめ)なりし 末弟(おとうと)夫婦に ただありがたし 家を出て五十年、いずれば佐賀にこの思ひは強まる 一つの日か 戻りて住まん その思ひ つのりきたりぬ 老ゆる日ごとく

入仏法要

実家の古い家の改修に合はせ、先祖伝来のお仏壇が古くなったので思い切って修理することにした。修理は照光寺様からご紹介いただいた蓮池の早田仏具店にお願ひした。仏具師の心を込めて修理する 古き仏壇 祭壇へ 名号捺像を 飾りまし 心込めたる 読経賜る うるしの香 漂ふ中に われら一同「正信偈」唱ふ(となふ)

2009年 民家再生奨励賞

唐津蔵の家 唐津市N様 再生工事

早いもので、この家を再生してもらってもう6年が過ぎた。古家があって、住むことに決め、それからまったく家作りの知識も予定もなかった私が民家再生の方々に引張られて再建の覚悟をした7年前。当時住んでいた札幌から毎月のように福岡の実家に飛んで工務店の社長さん(一生ものの恩人!)設計士さん(真っ先に声をかけてチャンスをくださった恩人)、現場の方々話し合いながらほんとうに家ができていくのを見るのは感動だった。

出来上がった当初は水周り、トイレなどにはしっかり私カラーをいれてもらったものの、雑誌で見るような実にすっきりした和の家。整理整頓掃除の苦手な私にはもったいない美しさ。

けれど、今までと変わらない家具が入り、道具が入り、生活していくうちに、やっぱり私流の雑然とした住まいになっていった。マンション暮らしが長いので(言い訳に過ぎないか)、家の手入れなどもよくわからず、一軒家を持つというイメージがそれまでなかったので戸惑ったところもあるけれど。

今の暮らし? 最高!!! はじめから何の違和感もなく安心してすーっと受け入れてくれた蔵の家、昔住んでいた叔母叔父祖父母曾祖母そのほかたくさんの人たちの思いに加え、私たちをもきつと包み込んでくれているのだと思う。

自然素材の日本家屋は外とつながっている感じがなんとも心地よい。リビングから見る庭は当初目が痛かった砂地はすっかり緑におおわれ、(芝生ではない、いわゆる雑草)ネコよけのネットを張ったカメの日光浴コーナーではカメたちがのんびり。植物もだんだん増えて季節ごとの花が楽しめる。葉もまかず、草取りもたまにのワイルドな虫の天国、害虫も多いけど美しい蝶などの虫、鳥もクウモリも来てくれる。(ウチ子するノラ猫は困るけど)室内には散歩の海でくつろいで飼っている水槽の魚たち、ヤドカリ、エビ、貝、イソギンチャクなど小さな生き物たち。

庭や水槽を眺めながらの毎日は、あー、みなさん、コメンナサイ、幸せです!

心をこめて造ってくださった皆さんには感謝感謝!

花見が浜の蔵 福岡県福津市 三原様 移築再生

土壁と木の温もりに囲まれて~再生古民家に住んでみて

- 建物**

私の家は、佐賀県七山村より納屋兼牛舎として使用していた蔵を、牛棗や敷石をそのまま再利用し、住宅として新たな命を吹き込んで再生させた土壁の家です。土壁は竹小舞に荒塗り、中塗り、上塗り、漆喰と何層にもなっていて約22センチ程の厚みがあります。
- 空気**

すっしりと重厚感で鎮座する玄関の蔵戸。その横には迫力満点の江戸中期の鬼瓦(享保7年)が訪れる方を出迎えます。その戸を開け中に入るとまず「空気」の違いが分かります。木の香りだけでなく、表現しにくいのですが日本人が本来持つ「和」のDNAが刺激されるとでも言うべき土壁の凜とした空気に包まれます。訪れた人たち(集金や配達員を含む)は例外なく皆「凄いですね」と感嘆の声をあげられます。
- 床**

床は厚さ40ミリの無垢材を使用しており、とても気持ちがよく歩きたびに木の温もりを感じます。又、時間とともに移りゆく自然の色調や質感、或いは傷でさえそれら全てが歴史を刻む斬新なデザインとして飽くことのない空間を演出し続けます。
- 新しいものとの調和(現代風にアレンジを加える)**

元来妻の洋風なものに興味があったこともあり、ただ武家屋敷のような「和」のみの雰囲気は嫌がってしまっていたので、照明器具は洋風なものを取り入れたり、壁の色も部屋によって土を混ぜ色合いを変えたりレンガや石などを使って現代風にアレンジを加えたりして和洋が混在している感もあります。ですから訪れる方は年配の方はもちろん、若い方たちからも「素敵ですね」と言ってもらっています。
- 子供達の笑顔**

子供達も元気に家中を走り回り、柱をよじ登ったり、梁にしがみついたりしています。また、薪ストーブや囲炉裏の火も興味を示し何でもしがりますが、危ないからといって何でも「ダメ」ではなく危険なことをしっかりと教えて危険を認識させたうえで体験させ、注意して見守ってやっています。そうすることで子供も元気にたくましく成長する事が出来ると思っています。遊びに来た子供達も何かそうした自然の力を感じるのか皆笑顔で木の家を体感し、必ず「また遊びに行きたい」と後で母親に言うそうです。
- 循環**

このような家に住んでみて私自身一番気に入って、家において本当に心が落ち着きます。民家も木も水もそして人も全て循環の中で生きています。この家はこれからも永くそして力強く大地に踏ん張り、私たちから子供たちへ、子供たちから孫へと受け継がれてゆくことでしょう。
- 出会いと感謝**

このような素晴らしい家づくりに携わってこられたたくさんの方々はこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。無駄口をきかず黙々と仕事をこなす秋月さん(大工の棟梁)。若いのに確実に伝統技術を継承している前山さん(左官職人、土壁)。私たちの無理な注文をいつも快く引き受けて下さった松尾さん(夢木香の社長)。引き渡し後も常に家の不具合はないか心配してくれ何かあれば遠方からすぐに駆けつけてくれました。松尾さんが「一生親せき付き合いをするつもりで家づくりをしていますから」と笑顔で語ってくれた感動は今でも忘れることが出来ません。本当にありがとうございました。そのほか、この家づくりをめぐって縁あった他の大勢の方々、本当にありがとうございました。

人が住まいをつくり 住まいが人の心をつくる

(沖縄の古民家 中村家住宅)